

「罪の文化」と「恥の文化」

大学入試の携帯電話でのカンニング問題が世間を騒がせているが、カンニングすることは「恥ずかしいこと」という感覚はどうなって来ているのかと、ふと思った。

「恥」の語彙で思い出すのは、文化人類学者ルース・ベネディクトは著書の「菊と刀」で「日本人の文化（アイデンティティー）は恥の文化」という。

キリスト教系の欧米社会はキリスト教による自らの神との対話による内面の善悪の絶対の基準（良心）に基づき自由に行動することを社会秩序の規範とする「罪の文化」に対し、日本社会は他人の目を気にして行動を律することを社会秩序の規範とする「恥の文化」と、ルース・ベネディクトは分析したよう。

つまり、日本では、周りの目からみてよくないことをするのは「恥ずかしいこと」ということか。

逆に言えば、人の目に触れさえしなければ自らの良心に関係なく「OK」ということになり、その事象として「八百長」、「カンニング」というようなことになるのかな？。

（でも、最近では「公共交通車内での堂々の化粧」等々のように、人目も関係ない事象も多くなってきているが…）。

戦後、欧米の自由主義、個人主義が入ってきたが、日本では自己の内面の「人としての良心」に基づかず、自由主義は自己中心主義に、また、個人主義は利己主義にどうも取り違えられたのではないかと思ってしまう。

さて、文化人類学的側面はさておき、今の日本の世相というべきか、「人として恥ずかしいことはしない」と自ら考えない人がどうして増えているのでしょうか？

育ちのプロセスの中で、「恥」を知るためにどういった育児、教育が必要なのか、今こそ改めて検証しないと、これからの社会は自己中心主義、利己主義が益々はびこりかねないことを危惧する。

また、若者でも「無縁」の不安に苛まれる人が増えているようだが、自己中心主義、利己主義には「無縁」に通じる要因もあるように思えるだけに、自らの内面（良心）を自らに問い続けることも大事な気がする。

さて、多様な価値観のある現代時代といわれながらも、「大学に合格することに至上の価値を見出す」ことに若者達を追い込むのは、この現代社会のどこに問題があるのでしょうか？

恥を捨ててまで人として何をしようとしているのかさっぱり解りませんので、あれこれ、ご意見をお聞かせください。